

2018年4月号の胃と腸「腸管感染症—最新の話題を含めて」の上部消化管編として本号は企画された。上部消化管を構成する臓器の特徴として、食道は強固な扁平上皮に覆われ、胃には胃酸が満ち、十二指腸には消化性酵素が分泌され、病原微生物が活動するには過酷な環境である。それゆえ *H. pylori* や軽度のカンジダ症、劇症型アニサキスなどの一部の感染症以外は、臨床現場では遭遇頻度の低いまれな疾患である。ただし、近年はHIV感染による免疫不全やステロイド薬の長期内服、化学療法中など免疫能低下状態の患者が増加し、上部消化管感染症の知識を得ておくことは重要である。

そのような時代背景も踏まえ、本号は蔵原、海崎、平澤が企画を担当した。まれな疾患を可能な限り網羅することを考え、各論はアトラス形式で解説を行った。また腫瘍性病変を惹起する感染症をノートとして取り上げ、carcinogenesisに関する最新の知見も掲載した。

まず序説で蔵原が、今回取り上げた疾患の概要を総論的に解説した。まれな疾患が臓器別に羅列され、抑えるべきポイントや注意点が記されている。症例アトラスに入る前段階の予習として必読である。病理に関する総論的解説は田邊が担当した。上部消化管感染症の多くは内視鏡検査のみで確定診断することは難しく、生検が必要になる。本稿では病理組織学的特徴からの適切な生検部位や病理医が診断に至るプロセスで必要な臨床情報が詳しく述べられている。

食道の症例アトラスは、単純ヘルペス:HSV(田中)、サイトメガロウイルス:CMV(高雄)、カンジダ[高橋(亜)], 結核(丸山)の感染症を掲載した。田中論文ではHSV感染の経時的変化による内視鏡所見の違いが提示された。高雄論文ではCMV感染は打ち抜き潰瘍が特徴的であると解説している。軽度の食道カンジダ症は臨床現場でよく遭遇するが、高橋(亜)論文では鑑別疾患の内視鏡像を提示して解説いただいた。食道結核は本号中でも取り立ててまれな疾患と考えられる。その貴重な症例を丸山が解説した。

胃の症例アトラスは、結核(八坂)、CMV(小林)、梅毒(堺)、カンジダ(池上)、アニサキス(松野)の感染症を取り上げた。結核感染症は食道も胃も多彩な形態を呈し、内視鏡検査のみの診断は困難なことが多い。全身検索から疾患へのアプローチが重要と述べている。全身検索の必要性はCMV胃炎

も同様である。堺論文では胃梅毒が2013年より急激に増加していることが記され、今後臨床で遭遇する機会が増える可能性があり、その内視鏡像の特徴は是非脳裏に焼き付けておきたい。胃カンジダ症は免疫不全状態や低酸状態で発生しうが、非常にまれな疾患である。ただ、池上論文のimpressiveな内視鏡像は一度見たらなかなか忘れられない。松野論文ではアニサキス虫体が胃壁内に刺入しているNBI拡大像が提示されている。いかにも現代風な画像である。

十二指腸の症例アトラスは、Whipple(長末)、糞線虫(金城)、ランブル鞭毛虫[高橋(索)], 非結核性好酸球:MAC(伊良波)の感染症を取り上げた。Whipple病は極めてまれな疾患であるが、発見が遅れると致死性になるため、特徴的な内視鏡所見(白色絨毛)を頭に叩き込んでおくことが望ましい。糞線虫症やランブル鞭毛虫症、MAC感染症もWhipple病同様に白色絨毛が特徴的である。免疫不全状態の患者でこのような白色絨毛を認めた場合は上記を鑑別に挙げ、各論文を診断への道標にしたい。

本号で取り扱った疾患の診断確定へのプロセスには生検はほぼ必須である。ノートの二村論文では、生検の有用性と限界について詳述いただいた。内視鏡検査のみ、病理組織学的検索のみでは確定診断に至ることは困難で、内視鏡医と病理医の意思疎通の重要性をあらためて痛感させられた。ノートではさらに、HPVとEBVにより惹起される発癌の特徴と最新知見を執筆いただいた。HPVは頭頸部癌に非常に関連していることが佐々木論文で述べられている。海崎論文ではEBV関連胃癌、EBV関連リンパ腫に関する最新知見を詳述いただいた。

以上が本号の概要である。*H. pylori* 以外の上部消化管感染症をほぼ網羅していると思われる。本号におけるmost rare diseaseは個人的には食道結核かWhipple病と思った。ただし、イソスポーラやほぼ駆逐されてしまった可能性もある疾患など、極めてまれすぎて紹介できなかった疾患もまだ存在することも付け加えておきたい。また、易感染状態の患者に遭遇する機会が増えている。それに伴い本号で取り上げたまれな疾患を今後目にする可能性が増えてくると思われる。その機会において、本号が診断に導く道標となる重要な一冊になることを期待している。

□ 訂正とお詫び □

---

本誌54巻12号(2019年11月号)の記載に誤りがございました。以下のとおり訂正してお詫びいたします。

■ 1683頁掲載「編集後記」(平澤大)：右段上から1行目

誤) 堺論文では胃梅毒が2013年より急激に増加していることが記され……

正) 堺論文では梅毒が2013年より急激に増加していることが記され……

---

□ 「胃と腸」編集室 □